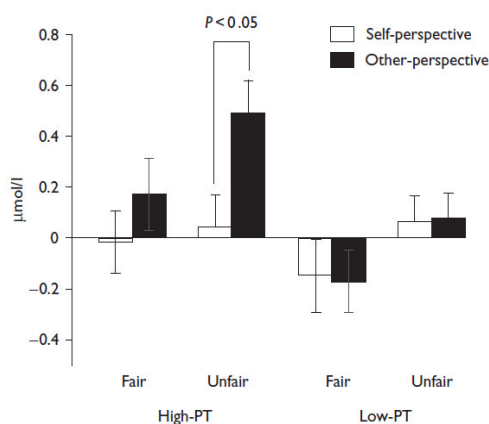
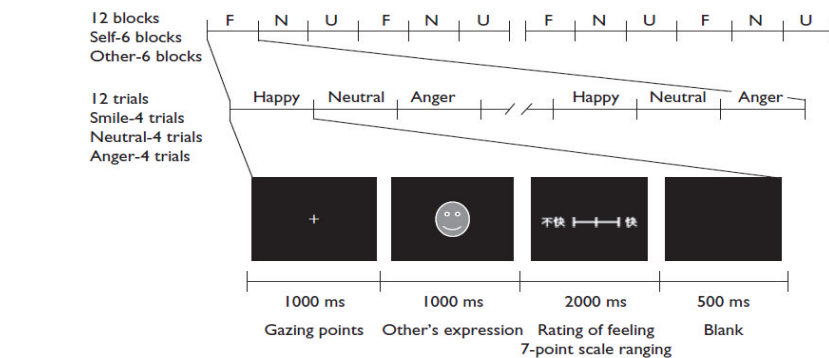


「不公平な相手」の顔表情に共感する際の脳内メカニズム

「自分の身を抓って他者の痛みを知れ」。古くから言われる諺ですが、実際には、関係のよくない相手の心情に添うことは容易ではありません。こうした他者の気持ちに共感する際の脳内反応に前頭前野腹外側部の活動が関係していることが NIRS（近赤外線分光法）で示されました。公募班員の野村理朗准教授（京都大学大学院教育学研究科）の研究室から、*Neuroreport* 誌に発表した成果です。

Perspective taking associated with social relationships: ANIRS study. *Neuroreport*, 21, 1100-1105.

Nomura, Y., Ogawa, T., Nomura, M. (2010)



実験に先立ち、公平（fair）あるいは不公平（unfair）にふるまうペアと、四人のジレンマというゲームを行います。続いて、ペアとなった人物の顔表情（笑顔・怒り・中性、のいずれか）を見て、その際の 1) 自身の気持ち、2) 相手の気持ち（快－不快）を個別に推測する課題を行いました（上図）。その結果、不公平な他者の顔をみる際、他者の視点に立つスキルの高い個人（High-PT）においては、それが低い個人と比較して、感情の抑制プロセスに関与する前頭前野腹外側部の活動が高まることを見出されました（左図）。

本研究の成果は、他者との関係性ならびに個人特性（視点取得のスキル）によって異なる共感メカニズムを示した国際的に新しい知見となります。

京都大学大学院教育学研究科 教育科学 野村 理朗
E-mail : nomura@educ.kyoto-u.ac.jp